

Title	King John and Matildaにおけるピューリタンの視点
Sub Title	Features of Puritanism in "King John and Matilda"
Author	小町谷, 尚子(Komachiya, Naoko)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2002
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 英語英米文学 No.40 (2002. 3) ,p.17- 36
JaLC DOI	
Abstract	Robert Davenport's King John and Matilda may be seen as sites of friction between Charles I and Parliament. Departing from his source play, Anthony Munday and Henry Chettle's The Death of Robert Earl of Huntington, Davenport shows his own critique of dominant principles of puritans, as well as a central problem in the increasing intrusion of parliamentary ideas into the Stuart court. Unlike the authors of other King John plays such as John Bale's King Johan, the anonymous play, The Troublesome Raigne of King John, and Shakespeare's King John, Davenport questions the regime of King John, and hence the contemporary rule of Charles I. Because in Stuart England Puritanism became a larger movement than that in Tudor England, the question of parliamentary ideals based on the principle of Puritanism is important to both Charles I and Parliament. In the depiction of King John's struggles with the barons, Davenport reveals such topical problems. The barons in the play aim for the reformation, and repeatedly plead the king for the importance of liberties guaranteed by the Magna Carta. In explaining the rights of their own, barons refer to the importance of covenants, which is the core of puritans' idea of direct relationship with God. Also, the play closes with harmonious concord between reason and religious mind when King John is guided with the martyrdom of the heroine, Matilda, who is praised for her marriage to God. Displaying puritans' two important features-covenants and reason, and thereby easing pressures within the government, Davenport suggests resolutions to the troubled England. Thus, the problem of growing parliamentary authority in the reign of Charles I can be provisionally resolved in the play by displacing the king's folly and then presenting the ideal of the social order based on puritans' viewpoint.
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030060-20020331-0017

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

King John and Matilda における ピューリタンの視点

小町谷 尚 子

ルネッサンス期に書かれた歴史劇の中で、ジョン王を主人公にしたものが数作ある。John Baleの*King Johan* (1538-60年)、作者不詳の*The Troublesome Raigne of King John* (1591年)、Shakespeareの*King John* (1596年)とRobert Davenportの*King John and Matilda* (1628-34年)である。Baleはジョン王を気高いプロテスタント殉教者として描き、それはJohn Foxeの『殉教者列伝』(*Book of Martyrs*)にも見られる愛国者のジョン王像に重なる。反乱貴族を愛国者として称えるPolydore Virgilはジョン王を批判したが、Raphael Holinshedはこれら二つの異なるジョン王像のアマルガムを『年代記』(*Holinshed's Chronicles of England, Scotland and Ireland*)で作り上げ、それは*The Troublesome Raigne*やShakespeareの*King John*に反映された。これらの作品は過去の時代と社会を背景にしつつも、そこに描かれた人物と歴史的過程との関わりはそれぞれ著作当時現在の問題に置き直されている。しかし、Davenportの*King John and Matilda*は、この点について前三作とは少々異なる特徴が見られる。先行作品はジョン王に肩入れするスタンスで彼の王侯としての資質を追求するという軸が通り、ジョン王の人間性を問うていた。それに対し、*King John and Matilda*では、ジョン王のマティルダへの執着を軸にしたプロットに貴族の反乱、王のローマ教皇への服従やブルース夫人とその息子の餓死といった事件が、ジョン王と対立する立場の視点に貫かれて配置されている。もともとこれらの出来事は材源となったHenry ChettleとAnthony Munday共作による*The Death of*

Robert Earl of Huntington (1601年出版) に描かれている事件であるが、そこではこれらは John Stow の『年代記』(*Annals of England*) の記述に見られるような徹底した悪党としてのジョン王を描き出すのに役立っていた。Davenport はこれに肉付けを行って、材源とも先行作品とも異なるジョン王像を新しく造形している。

執筆時期と題材

ジョン王を題材とした先行劇はそれらが書かれた時期の社会や思想を反映し、またそれによって規定されてもいるが、基軸に据えられたものを見る限り、歴史認識も違い、作劇の作法も異なっている。*King Johan* において、John Bale が中世劇の伝統を受け継ぎつつ描いたのはジョン王のプロテスタント殉教者としての側面であり、王の愛国主義を読むことができる。¹ 一方、*The Troublesome Raigne of King John* は、体制を支持する側の視点で描かれており、アルマダ時代のイギリスの愛国主義、反カトリック主義、国王至上主義を打ち出したプロパガンダ劇として位置付けられる。² 斎藤衛は「独自の内面性、倫理性」をこの劇に見て、それが「この劇の平板化を招いている」と指摘する。³ 確かに *The Troublesome Raigne* では動乱の一時期を舞台にイギリスを統一する目的が見え隠れし、その切り取った歴史の固有性が際立っているが、反面、多角的な視野や重層性を作り出す虚構を抑えようとしているようだ。それが斎藤の言う「平板化」をもたらすものの正体ではないかと考える。*King John* で、Shakespeare は史実の隙間に介入しつつも、心理ドラマに墮することなく、また国民史観に拠ることなく中立的にジョン王の没落を描いた。ジョン王治世の荒廃の原因を人間の私利私欲に見るという Shakespeare の虚構は、特定の個人を特別視したり特権化したりすることなく時代の全体像を問い、歴史の推移を描いたことで、独創性があった。

上にあげた先行作品はいずれも著作年代の対外政策を映している。これらは、他国の侵攻あるいはイギリス国教会に圧力をかけるローマ・カト

リック教に敵意を表して、ジョン王を賞賛したり、ジョン王を支持したりする立場を取っていた。同時に、*The Troublesome Raigne* や *King John* では、女性君主の存在が危ぶまれ統治基盤が安泰ではなかったエリザベス女王の治世を反映して、王位継承権が主題の一つとなっていた。描き方に違いがあるものの、ジョン王治世の対外問題はチューダー朝を生きる作家にとって無視しがたい現在性を持っていたのである。他国を敵とみなしてイギリスへの愛国精神を表明する点で、これらの作家は同じ風土のもとで作品を著したといえるだろう。これに対し、*King John and Matilda* では、ローマ・カトリック教との反目よりは、国内の貴族の反乱が鮮明に描かれるところに特徴がある。この作品の推定執筆時期は1628年から1634年であるが、ここに主題が異なる理由の答えが見出せよう。すなわち、ピューリタンの台頭である。ピューリタンはカルヴィニストを中心に諸派に分かれるが、徹底した教会改革を求める点でピューリタニズムという一つの運動に属する人々と見ることができる。1625年にジェームズ一世が亡くなってチャールズ一世が即位し、このころからピューリタンの勢力は増してきた。ピューリタンはエリザベス朝から確かに地歩を固めつつあったが、女王の治世の間はその勢力を大きく発達させることがなかった。1603年にジェームズ一世が即位した時、スコットランド長老派に囲まれて育ったジェームズの生い立ちからピューリタンは彼による改革を大いに期待したのであるが、ジェームズ一世の宗教政策は長老派に大きく傾くことはなかった。そのようなすぶった状態にチャールズ一世の即位である。勤勉と儉約を旨とするピューリタンは王室の奢侈に批判的な議会派と結びついていき、多くの信徒が議員として議会に籍を置くようになった。⁴ と同時にチャールズ一世とカトリックの王妃ヘンリエッタ・マライアとの結婚により、イギリス国教会に圧力をかけつづけたローマ・カトリック教の勢力に対する懸念も出てきた。チャールズ一世は終身イギリス国教会の信徒であったけれども、彼の重用した国教会の指導者ウィリアム・ロードがカトリック的な儀式を重んじたため、チャールズ一世の教会政策はピューリタンの反感を

買った。王権神授説を確信して王権を行使しようとするチャールズと財政政策に異を唱える議会との亀裂が深まり、議会は1628年に権利請願を提出する。議会在国政に対する自らの義務を意識し始めて教会政策にも踏みこんだとき、チャールズは議회를解散し、以後11年間議会は召集されず、チャールズの専制的政治が始まる。さらに、時を同じくして、ロードが1628年にロンドン教区主教ならびにオックスフォード大学総長、1633年にはカンタベリー大主教に任命される。彼はチャールズの片腕として行動し、ピューリタンを抑えていこうとしたため、強い反発にあった。すなわち1625年のチャールズの即位を境に英国は王とピューリタンとの対立の時代を迎えていたのである。その中であって王権はその意義や重みを問われることになった。このように宗教地図の面から改めて王権を眺めてみると、Davenportが内政の混乱と王権の揺らぎを特徴とするジョン王時代に注目したのもうなずけよう。*King John and Matilda*では、ジョン王の愛国者的な側面は取り上げられない。となるとDavenportが作品に照射した歴史認識も先行作品の作家のものとは確かに異なっていたと見ることができる。

契約精神と改革

*King John and Matilda*と材源の劇 *The Death of Robert Earl of Huntington* との異なる理由を、時代を隔てた観衆の嗜好における違いに求めたのでは事欠く。*King John and Matilda*では、冒頭でジョン王の召還に対する貴族らの拒絶が伝えられ、彼らが王への苦情を列挙しようとしていることが紹介されるのに対して、*The Death of Robert Earl of Huntington*では、まずジョン王のマティルダへの執着が示され、王は彼女を忘れて貴族らの忠心を取り戻すようにいさめられる。この冒頭の違いから、Davenportがジョン王の独裁ぶりに反抗する貴族に焦点を当てていることは確かであり、それはマグナ・カルタへの言及や“ancient liberties”を侵害する王への反感によりはっきり見て取ることができる。貴

族たちのリーダーであるフィッツウォーターはジョン王に、契約を守れば貴族の不満が収まると言う。

Perform but the seal'd Covenants you are fled from,
The Charter running thus, given by our hand
The seventeenth day of June, and in the year
1215 (the whole Realm being sworn to't,) (I.3.110-13)⁵

ここに引き合いに出されたマグナ・カルタは、貴族たちが権利と自由の保障を再確認するためのもので、マグナ・カルタ成立のいにしへの事情、すなわち、貴族たちがジョン王にマグナ・カルタの制定を強く求めたことを思い起こさせるものではない。Albert H. Tricomi はこの制定日についての記述を神聖な文書としてマグナ・カルタを祝すものと見たが、⁶ この場ではむしろ、ジョン王をいさめるフィッツウォーターの言葉に王の独断と暴君振りが示されていると見るほうが妥当である。年代順の狂いもまたそれを裏付けよう。史実では貴族の反乱はジョン王がマグナ・カルタに従わないことを理由としてジョン王治世の末期に起こり、そのさなかにジョン王は死ぬ。*King John and Matilda* では、最後に和解と将来への見通しが語られることを見ても、ここでのマグナ・カルタへの言及は約束された事柄に重きを置いたものであることは明らかである。

さらに、フィッツウォーターが王への忠誠を強調しつつ自分たちの権利について訴える場面でもマグナ・カルタが引き合いに出される。

there the King and Barrons
Met for discussion of conceiv'd wrongs,
And indeed not misconceiv'd, our Houses, honours,
Our Fathers freedoms, the Lands ancient Liberties
(Unjustly to encrease some private Cofers)

Felt daily Diminution, there to Covenants drawn,
 (Bearing the name and sence of *Magna Charta*,
 Which many hundred years may be seen hereafter)
 King John subscrib'd, we swore him fealty. (II.4.110-118)

Tricomiはこの部分をフィッツウォーターが「時代錯誤的な見直し」を持って証書の効力について語っていると見るが、⁷ それはマグナ・カルタ制定時に視点を移した見方であり、この劇が執筆されたところにチャールズ一世と議会の対立関係が深まった事情を考慮していない。失政による財政的負担を被った議会が権利の請願を行った当時の事情を暗示しつつ、王と貴族の齟齬を表面化しており、マグナ・カルタの効力を問題としているのではないことは疑いようがないだろう。「諸自由」(Liberties)の一つであり、権威に対抗する個人が主張の確認を行う基盤と見て、貴族たちはマグナ・カルタを引き合いに出すのである。貴族たちが折に触れ「諸自由」^{リバティーズ}について言及するのは、ジョン王の失政への不満からであり、踏みにじられた権利を取り戻したい意図がうかがえる。

一方で、Tricomiは君主政治の暴走を抑える議会の権限という時局的な要素がこの劇に書き込まれていることを認めている。また、貴族たちがジョンに教皇に献金を差し出す約束証書に署名しないよう訴える有り様を議会のチャールズ一世への権利請願に引き比べることができると指摘する。⁸ これらの要素が時代を映す話題として観衆の関心を集めただろうということは想像に難くないが、ここで注目しておきたいのは契約(“Covenants”)への言及である。フィッツウォーターは自分たちの権利を契約という言葉を用いて主張する(上記引用中 [I.3.110], [II.4.115])。契約の精神は、ピューリタンたちが重視した思想であって、もともとは神と人との間の約束を意味していたが、教会を組織する際の人と人との契約の意味にも用いられるようになっていった。Davenportがフィッツウォーターにマグナ・カルタの名を借りて契約を語らせるのは、チャールズの政

策に反対するピューリタンの信念が契約の精神に根ざしていたことを明らかにし、さらには、王と議会との間にその精神に基づく結びつきを期待していたからであろう。

貴族たちにとって為政者の存在価値は人物にはなく、その職務にあった。フィッツウォーターは、ジョンがマティルダへの情欲に目がくらみ、政治の方向性を見誤っているとしても、ジョンが王であるゆえに従うという姿勢を崩すことがない。あくまで、政治が正道に戻るよう、王をいさめようとするのである。国の荒廃をもたらす世辞追従者（“state-mice”）について述べつつ、フィッツウォーターはジョン王に語りかける。

This troubl'd us, and griev'd the body Politique,
And this we sought to mend; I tell truth *John*, I,
We are thy friends *John*, and if ye take from friendship
The liberty of modest admonition,
Ye leave no mark whereby to distinguish it
From the fawning passion of a Dog-base flattery; (I.3.77-82)

貴族たちは、自分たちと友好関係を取り結び、助言を聞き入れて統治を行う為政者を待ち望んでいる。王がどのように職務を遂行してゆくかが重大事と考えるからこそ、フィッツウォーターは追従に左右される不安定な「政治的身体」(the body Politique) に懸念を表明し、正しい姿の政治へ引き戻す協力を惜しまぬことを表明するのである。

また、この言及はチャールズ一世の片腕となって、専制的な政治を推し進めたウェントワースやロードに対する皮肉ともなっていよう。ここで、フィッツウォーターをリーダーとする貴族たちとジョン王の隔たりをこの劇の著作年代の社会に当てはめると、チャールズ一世と台頭してきたピューリタンと結びついた議会との対立の構図が見えてくる。*King John and Matilda* の作者 Davenport はピューリタンであった。⁹ エリザベス一

世、ジェームズ一世を見守った長老派も、チャールズ朝には為政者が宗教改革を行うのを静観して待つという姿勢ではいられなくなった。そのような気運の中で *King John and Matilda* を書いた Davenport の懸念は、冒頭のおックスフォードが伝えるフィッツウォーターの言葉に見ることができる。

Tell John, quoth he, (and frown'd)

That here at Baynards Castle, we intend

A settled stay for private reformations

Of conceiv'd injuries, which by the peace

The King made with us, were not thoroughly search'd, (I.1.9-13)

改革を行うこと、これはエリザベス朝の時代からピューリタンが主張しているものである。ジョン・ホイットギフトは「正しい改革を求めるものこそこの国における女王陛下のもっとも良き臣民」であると断言している。¹⁰ 冒頭のフィッツウォーターによる“private reformations”への言及は、Davenport が反乱貴族たちを時の王チャールズ一世の教会政策により苛立ったピューリタン／議会派に重ねあわせて改革への期待を表したものであり、また、劇の主題として終幕のジョン王の改心に照応していくものである。

マティルダの殉教が導くもの

Martin Butler は1630年代にはエリザベス朝へのノスタルジーによって Foxe の『殉教者列伝』に材を取った劇が盛んに産出されたと述べている。彼はローマ・カトリック教の専制とチャールズ一世の政治を重ねあわせて見る風潮に、*King John and Matilda* の成立を見て取り、Foxe の著作に見られるローマ教皇の使節に膝まずくジョン王の挿絵が劇化されたものと論じている。¹¹ 確かに Davenport はジョン王のローマ・カトリック教への

帰依を描いたが、これをもってしてプロテスタントの勝利が謳われていると見ることはできまいし、また、この一事象のみ取り上げて作品の特徴と言い切ることはできまい。なぜならば、劇のアクションは王と貴族、王とマティルダの対立の深まりを中心に進行してゆくからである。劇のごく早い段階で貴族らは王への不満を表し、改革への抱負を語り、全編を通して自分たちの特権を主張する。劇の後半では、ジョン王のマティルダへのみだらな欲情と彼女をものにしようと画策する姿が顕著になってくる。となれば、劇の主筋を成すマティルダとジョン王との関係が貴族の反乱とどのように絡むのかを見ておく必要がある。

Carole Levin は、ジョン王とマティルダの関係を劇の象徴と論じており、新鮮な解釈であるが、それが何の象徴であるかについては詳しい説明を避けている。¹² 一方、*King John and Matilda* の編者 Joyce O. Davis は、マティルダをジョン王が臣下に対して犯した罪の象徴と指摘している。¹³ Davis は政治的かつ私的なレベルでの混乱の責をジョン王に求めて、コモン・ローが王権神授説の上位にあることを王に認めさせることで動乱が鎮圧される筋を読んだが、この読みではマティルダの殉教の意義が十分に説明されない。ジョン王はマティルダを追う自分の行為を“passion”のゆえと説明するが、マティルダはジョン王の“passion”の対象では片付けられないものがある。まず、マティルダの存在意義から探ってみよう。マティルダは自分の貞操を守るためには自殺するしかないという状態に追い込まれる。内乱は、彼女が Baynard's Castle に逃げたことから始まるが、この彼女の行動に固い信念のもとに不当な圧力には屈しない精神を見て取ることができる。つまり、マティルダの父フィッツウォーターを中心とした政治改革の引き金の役割と、信仰を導き手とする精神とを同時に体現するのがマティルダなのである。それに対し、ジョン王は国を賭けても彼女を我が物にしようと、政治を顧みない。

Oh, my Matilda, if power or policy

May get thee once more in these arms, I will hazard
Even to a kingdom for thee ; (I.4.45-47)

情欲に身を任せ、貴族らのいさめを聞き入れず、国を危機に陥れるかもしれないジョン王の姿は、チャールズ一世の専制政治を彷彿させる。この直前にジョン王がローマ教皇の使節パンダルフの応対に苦慮するが、結局ジョン王は内乱を鎮める目的でローマ教皇に従うことにし、パンダルフに王冠を差し出す (II.4.1-14)。このとき、反乱者側のフィッツウォーターが居合わせ、王の行為は国を裏切るものだと言う。

Do not peruse it John, though thou and we
Have had some bickerings, yet let me counsel thee,
This is my Countries Cause. (II.4.24-6)

あくまで、王に対して忠臣でありたいとの姿勢を貫きつつ、国を守るためにフィッツウォーターは王への苦言を忘れない。フィッツウォーターはジョン王のローマ教皇への服従に、王による「諸自由」^{リバティーズ}の侵害や権力の濫用を見て嘆く。

So, so, now we must suffer
The Kingdoms ancient Liberties, Land, lives,
And all to run the course that he shall steere,
Good heaven that I werd dear, what do I here. (II.4.85-88)

「諸自由」^{リバティーズ}への言及は、材源の劇*The Death of Robert Earl of Hunting-*
*ton*には出てこないものである。マグナ・カルタで保証された「諸自由」^{リバティーズ}
を保有する臣民の権利が、このように何度も話題に上ることは、*King*
*John and Matilda*の執筆時期が、議会がチャールズ一世に権利請願を

行った時期に重なる、あるいは、その波紋が大きかったことであることを裏付けると同時に、劇作家の関心が臣民の権利にあったことを示すものであろう。

さて、このジョン王と貴族たちの一連の「諸自由」^{リバティーズ}をめぐる応答が、内政をめぐるチャールズ一世と議会の内政をめぐるのありようを示唆するものならば、ジョン王とマティルダの関係は、それと平行してチャールズ一世の専横振りを別のレベルで形にして見せたものと読むことができる。ジョン王は自分になびかないマティルダをレイプしようとする。レイプの対象として彼女に身体性が与えられた理由は、拒絶するマティルダに貞節を体現させるためというよりも、どうやら、彼女に政治的・宗教的表象を託したためではないかと推測することができる。他者支配のメタファーとして用いられるレイプは、ここではマティルダを抑圧するものとして機能している。議会を開催せぬまま国王大権を行使していたチャールズ一世の姿をジョン王に重ねるとよい。カトリックの儀式を取り入れたイギリス国教会を支持するチャールズ一世と、ピューリタンが大勢を占めた議会派との力関係がジョン王とマティルダの二人の関係にこだましていると見ることができる。さらに、「諸自由」^{リバティーズ}を重んじる劇全体の流れから見れば、ジョン王とマティルダの関係によって「諸自由」^{リバティーズ}の剝奪者と非剝奪者の関係が描き出され、1629年から1640年にかけての独裁者チャールズ一世と開催されぬままの議会の関係が示唆されているのである。

ところで、脇筋の有力貴族の妻ブルース夫人とその子の餓死は、ブランドが自分になびかぬ夫人と自分をなじる夫人の息子に対して仕返しをすることによってもたらされる。*The Death of Robert Earl of Huntington* に描かれたこの出来事は、*King John and Matilda* では、異なる様相を帯びているようだ。前者ではジョン王の命令によりブランドが二人を閉じ込めるが、後者では、ジョン王は二人をブランドにゆだねるだけで二人の餓死への関与は薄い。しかしながら、このエピソードの持つ意味は深い。前者では主筋を構成するエピソードとして組み込まれているが、二人の最期

に重点が置かれて、全体としてはその扱いが軽いのに対して、後者では主筋から独立させて脇筋として仕立て直されている。ブランドが夫人に愛人になれと強要した挙句、言うことを聞かぬ相手を死に至らしめるという筋は、後にジョン王がマティルダへの恋心を募らせレイブをたくらみ、後には恋心を復讐心に替えて殺意を抱くこと的前景となっている。すなわち、ジョン王のマティルダへの横恋慕や横暴をより鮮明に浮かび上がらせるためにパラレルに置かれたものであり、それは従妹のマティルダの遺体を発見した際のヤング・ブルースの言葉 “This parallels my Mother and my Brother” (V.2.115) にも明らかである。ブランドが後にジョン王の命を受けてマティルダに毒を盛る殺人者として再び登場し、ヤング・ブルースとのやり取りで材源にはない豊かな個性を見せるのも、単なる命令の遂行者から意思ある人物として書かれているのも、ジョン王の行為の非道さを示唆する存在であるからであろう。

また、二人の餓死は *The Death of Robert Earl of Huntington* では言及されるにとどまり、演じられることがない。*King John and Matilda* では二人はブランドに屈するくらいならと死を甘んじて受け入れる場面が展開される（4幕1場）。ブランドはブルース夫人に愛人になることを承諾させようとして、目に見えなければ関係を持つてもはばかることはないとかどくが、ブルース夫人はこれを強く否定する（3幕1場）。神との直接的な関係を重んじる信仰を持つ者には到底受け入れることはできない誘いであり、これは後にマティルダが王との結婚をかたくなに拒む場面に呼応してゆく。ブルース夫人のブランドの非道に屈しない強固な意志と自分を律する精神は、マティルダの見せる信念に匹敵し、畢竟、ピューリタンの厳しい信仰のあり方を反映するもののように思われる。すなわち、この餓死の場面は、マティルダ、ブルース夫人とその息子の体現するピューリタンの生き方とそれに反するジョン王とブランドの姿を対照的に描き出す役目を担っている。

さて、いったんは捕らわれの身となったマティルダは、ヒューバートの

理解と助けを得て、ダンモアにある修道院に向かう。ジョン王はフィッツウォーターと和解して、イザベル王妃を離婚してマティルダを後に迎えようと約束すると (IV.3.65-70), フィッツウォーターは娘を説得して修道院を訪れ、ジョン王の欲情を見抜きつつも、ジョン王との結婚を勧める。激しく拒絶し王と自分とに別れを告げたマティルダを、フィッツウォーターは称える。

She is married

To the Kings Master, oh to the noblest King
Poore supplicant ever kneel'd to, to your King,
And her King, and to my King she's married ;

....

This, this was chaste Matilda's Marriage day. (V.1.83-92)

王との結婚ではなく、Kings Master=神との結婚を選んだ娘への祝福は、神との契約に貞節であろうとする娘への祝福である。ここにも神との直接の関係を築こうとするピューリタンの姿勢が垣間見えよう。また、王権の上位に神の権威を認めようとする態度には、王権神授説を拠り所とする時の王チャールズ一世の権威に投げかけられた疑問がこだまする。彼女が自分のものにならないと悟ったジョン王はマティルダ殺害を決意し、ブランドを殺害者として遣わす。その後、ジョン王は過ちに気づき貴族と和解する。フィッツウォーターは王の改心^{リパチエーズ}を認め、「諸自由」を再確認する。このフィッツウォーターの観察は劇の大団円を予期させるものともなっている。

the King now looks

Upon his passions with a displeas'd eye,
Trust to our faiths sir, give the Land her Liberties,

And do but look upon my poor Matilda. (V.3.66-69)

が、ときすでに遅く、マティルダはブランドにより毒殺されている。ここでジョン王の失政のもととなった職務放棄をパラレルに体现したブランドが、ヤング・ブルースによって母と弟、そして従妹マティルダの敵として討たれて姿を消す。終幕の直前に用意されるこの場面により、ジョン王が突然改心するのも後の治世に希望が託されるのも自然に受けとめることができよう。

亡きマティルダに手向けられた言葉“To Piety and Chastity.”と歌“here laid/(In one) a Martyr, and a Maid.”(V.3.)が彼女の人生を物語る。マティルダは、これ以前にもたびたび“saint”(IV.2.70; V.2.26)と称されてきたが、ここへ来て彼女の殉教者としての存在が確認されることには深い意味がある。Baleの*King Johan*や*The Troublesome Raigne*では、ジョン王こそが殉教者として描かれて、その愛国者精神が称えられた。それに対して、*King John and Matilda*では、マティルダの殉教によりジョン王の信仰への回帰がもたらされる。ジョン王は愛国者でも殉教者でもない。Davenportがジョン王を批判的に書いたのは、王側の視点ではなく王と対立する側の視点を持っていたためであろう。ジョン王はマティルダの敬虔な人生を認め(V.3.172-182)、自らの不品行を悔いる。

Let my wild errors, tell to time this truth ;
 Whil'st passion holds the Helm, Reason and Honour
 Do suffer wrack ; but they saile safe and cleer,
 Who constantly by Virtues Compasse steer. (V.3.208-211)

マティルダの死によって、ジョン王は王としての職務に目覚めるのであり、このとき、王と貴族たちとの本当の和解も確認される。フィッツウォーターはジョン王に進言し、いさめる目的でフランスに後押しを頼もうとは

するが、自らジョン王を倒すことを企みはしない。むしろいったんは他の貴族をいさめる。これは先行する劇に見られない特徴である。*The Troublesome Raigne* や Shakespeare の *King John* では、貴族たちはジョン王を討つ計画を練り、旗色悪しと見れば寝返るのであって、彼らに愛国者の側面を見るのは難しい。それに対して、常に王への忠誠心を表明するフィッツウォーターに愛国者の姿が浮かび上がる。この場の王と貴族の和解は権利の請願を行ったころの議会派が夢見たようなあるべき姿の政治ではなかったか。編者 Davis は王の改心の場に、王権神授説からの脱出——law が王に優り、貴族らが王と対等の立場になることが世直しの道である——を認めている。¹⁴ ジョン王最後の台詞にエリザベス朝にない新しきを見るとすれば、“Reason” への言及ではあるまいか。“passion” や “lust” に突き動かされてきた王が、信仰を裏打ちする “Reason” を取り戻し、その舵取りによって正しい “the body Politique” として生きるようになるという設定は、ピューリタンと議会派が理想とした王の在り方であろう。おりしも、エリザベス朝のプラトニズムはチャールズ朝にいたって、ピューリタニズムと結びつきケンブリッジ・プラトン学派を生み出している。¹⁵ この学派の創始者ベンジャミン・ウィチカットは信仰と理性の調和を説いた。後にはピューリタンと対立する一派であるが、*King John and Matilda* が創作されたころは、ちょうどピューリタンの思想とプラトニズムとが結びついていく時期であり、信仰と理性の調和を見る学説はピューリタニズムの土壌から生まれている。Davenport は無意識だったかもしれないが、時代の方向性が作品に書き込まれたのであろう。

*

これまで見てきたように *King John and Matilda* では、王の職務放棄や資質の不足が、ジョン王のマティルダへの執心の筋に絡めて提示されてきたが、最後にはマティルダの殉教に導かれた王の改心と理性に基づいた政治への期待が描かれている。ここが *King John and Matilda* がピュー

リタンの思想のもとに書かれた上、ピューリタンと議会派の結びつきを描いたと思われる所以である。1619年から1640年にかけての劇に体制に反対する者たちの政治的手段を読む Margot Heinemann は、ピューリタンの志向については無言のままである。しかし Heinemann は、劇最後にジョン王が抱く愛国心と職務の自覚は、貴族らの反抗や侵攻にたいする怖れとマティルダの殉教への悔いをもたらすと認め、さらに貴族らが道德の勝者として描かれたと論じている。¹⁶ 同時代の事情をかんがみて *King John and Matilda* を政治的な劇を読むとき、信仰と理性を調和させる収束に確かに議会派と結びついたピューリタンの期待が見出せよう。

King John and Matilda が特定の時代に固有の事柄を描いたものである以上、以後、この劇があまり取り上げられなかったことも説明がつく。1655年の出版の後、1662年に第二版が出版されてからは、19世紀に Lamb や Swinburne による好意的な評をわずかに認めることができるのみである。ピューリタンと議会派が王との攻防に四苦八苦していたころの一時期が背景にあるうえ、この劇は貴族側の愛国精神を取り上げている。共和制政治の際にはジョン王とその仕事マグナ・カルタ制定は好意的な目で再評価されることもあった。¹⁷ 王の側に与するか、議会の側に与するか、どちらの立場で書かれたかは劇の命運を左右したに違いない。しかしその一方で、王朝交替劇の枠組みを脱しているうえに、王の資質をその政策に見て普遍性を見せた先行作品とは大きく異なっていることは新しい。*The Death of Robert Earl of Huntington* の編者 W. Carew Hazlitt は、作品の出来栄えについて *King John and Matilda* は *The Death of Robert Earl of Huntington* に描かれた出来事を模倣したものだとして後者に軍配を上げる。しかしながら、Davenport がジョン王と貴族の反目を背景に、自らの生きる時代における王と議会の関係の転換期を描いたことを過小評価すべきではないだろう。チャールズ朝の思想、宗教、政治におけるさまざまな胎動がこの作品の生まれる原動力となったのである。宗教と王権、その両立をめぐる常に議論されてきた事柄を書くと言う要求に応え、

ピューリタンの台頭という時代の趨勢を描くのに、Davenport にとって格好であったのはジョン王の治世を借景とすることであった。

注

* 本稿は第40回シェイクスピア学会 (2001年 於九州大学) のセミナー「Stuart 朝歴史劇」における口頭発表の原稿に加筆訂正を施したものである。コーディネーターの筑波大学佐野隆弥氏、メンバーの九州大学太田一昭氏、岩手県立大学石橋敬太郎氏には、多くの助言をいただいた。

1. Barry B. Adams, ed., *John Bale's King Johan*. (San Marino: Huntington Library, 1969), p. 25. 中世劇の伝統と Bale の著作については次を参照。Peter, Happe ed., *The Complete Plays of John Bale*. Vol. 1 (Cambridge: D. S. Brewer, 1985).
2. Carr は *The Troublesome Raigne* をプロテスタントのイデオロギーが貫かれたプロパガンダ劇と論じた。Virginia Mason Carr, *The Drama as Propaganda: A Study of The Troublesome Raigne of King John*. (Salzburg: Universitat Salzburg, 1974).
3. 斎藤衛『シェイクスピアと聖なる次元——材源からのアプローチ——』(北星堂書店 1999年), p. 49。
4. ピューリタニズムについては以下の書が詳しい。M. M. Knappen, *Tudor Puritanism*. (Chicago: University of Chicago Press, 1939); R. J. Acheson, *Radical Puritans in England 1550-1660*. (London: Longman, 1990); J. R. H. ムアマン『イギリス教会史』八代崇, 中村茂, 佐藤哲典訳 (聖公会出版 1991年); 小嶋潤著『イギリス教会史』(刀水書房 1988年); 浜林正夫著『イギリス宗教史』(大月書店 1987年)。
5. 引用は全て Joyce O. Davis, *Robert Davenport's King John and Matilda*. (New York: Garland, 1980) による。
6. Albert H. Tricomi, *Anticourt Drama in England 1603-1642*. (Charlottesville: University Press of Virginia, 1989), p. 151.
7. *Ibid.*, p. 151.
8. *Ibid.*, p. 150.

9. Butler は、Davenport が *Crown for a Conqueror* で死に行くカルバン主義者のペルソナを被って語っていることに着目し、彼にピューリタンの性向を認めている。Martin Butler, *Theatre and Crisis 1632-1642*. (Cambridge: Cambridge University Press, 1984), pp. 191-192. また、Tricomi も Davenport をピューリタンと断じている (p. 151)。
10. 浜林, p. 120.
11. Butler, p. 201.
12. Carole Levin, *Propaganda in the English Reformation: Heroic and Villainous Images of King John*. (Lewiston: Edwin Mellen Press, 1988), p. 244.
13. Davis, p. l-lix.
14. *Ibid.*, p. lvi-lix.
15. ケンブリッジ・プラトン学派については以下の書を参照。Basil Willey, *The English Moralists* (London: Chatto & Windus, 1964); Frederick J. Powicke, *The Cambridge Platonists: A Study* (Westport, Connecticut: Greenwood Press, 1926, reprinted in 1970); エルンスト・カッシーラー著『英国のプラトン・ルネサンス』三井礼子訳 (工作社1993年); 鎌井敏和, 泉谷周三郎, 寺中平治著『イギリス思想の流れ——宗教・哲学・科学を中心として』(北樹出版 1998年); 新井明, 鎌井敏和共編『信仰と理性——ケンブリッジ・プラトン学派研究序説』(御茶ノ水書房 1988年)。
16. Margot Heinemann, *Puritanism and Theatre: Thomas Middleton and Opposition Drama under the Early Stuarts*. (Cambridge: Cambridge University Press, 1980), p. 226.
17. William M. Lamong, *Puritanism and the English Revolution Vol. I: Marginal Prynne 1600-1669*. (Routledge and Kegan Paul, 1964; reprinted. Gregg Revivals, 1991), pp. 93-8.

Synopsis

Features of Puritanism in *King John and Matilda*

Naoko Komachiya

Robert Davenport's *King John and Matilda* may be seen as sites of friction between Charles I and Parliament. Departing from his source play, Anthony Munday and Henry Chettle's *The Death of Robert Earl of Huntington*, Davenport shows his own critique of dominant principles of puritans, as well as a central problem in the increasing intrusion of parliamentary ideas into the Stuart court. Unlike the authors of other King John plays such as John Bale's *King Johan*, the anonymous play, *The Troublesome Raigne of King John*, and Shakespeare's *King John*, Davenport questions the regime of King John, and hence the contemporary rule of Charles I. Because in Stuart England Puritanism became a larger movement than that in Tudor England, the question of parliamentary ideals based on the principle of Puritanism is important to both Charles I and Parliament. In the depiction of King John's struggles with the barons, Davenport reveals such topical problems. The barons in the play aim for the reformation, and repeatedly plead the king for the importance of liberties guaranteed by the Magna Carta. In explaining the rights of their own, barons refer to the importance of

covenants, which is the core of puritans' idea of direct relationship with God. Also, the play closes with harmonious concord between reason and religious mind when King John is guided with the martyrdom of the heroine, Matilda, who is praised for her marriage to God. Displaying puritans' two important features—covenants and reason, and thereby easing pressures within the government, Davenport suggests resolutions to the troubled England. Thus, the problem of growing parliamentary authority in the reign of Charles I can be provisionally resolved in the play by displacing the king's folly and then presenting the ideal of the social order based on puritans' viewpoint.